

海洋プラスチックをアクセサリに

愛知淑徳大学の学生ボランティア活動 SDGsにも貢献

海洋プラスチックは世界中の海に1億5000万トンあり、さらに年間800万トンが新たに流入しているといわれている。国連サミットで採択されたSDGs（持続可能な開発目標）では、この問題を改善するために目標14「海の豊かさを守ろう」が掲げられ、大学でも様々な取組みが行われている。海洋プラスチック問題に取り組み愛知淑徳大学の事例を紹介する。

交流文化学部での取り組み

愛知淑徳大学交流文化



プラスチックごみが大変身

学部の林セミの学生は、海岸に漂着したプラスチックを回収し、それらを素材としてハンドメイド

のアクセサリを制作する取組を行っている。セミの卒業生が携わる岐阜県多治見市を活動拠点に海洋プラスチックアクセサリを制作・販売している「sodion」のワークショップ体験がきっかけで、海洋プラスチック問題により深く関わりたいと2021年に学生5人が海でのゴミ拾いから商品化まで「sodion」をサポート、妹ブランドとして「Tanabon」を立ち上げた。このたび、5月18日、23日にジェイアール名古屋

屋カシマヤにおいてSDGs催事「やさしい暮らしと彩るモノたち」において海洋プラスチックのアクセサリが店頭に並ぶ。

同日イベントにともない、3月6日に、愛知常滑市多屋海岸でゴミ拾いを行い、材料として使えそうなものを選別し、洗浄、乾燥を行う作業を行った。3月17日、4月17日には、デザイン考案、アクセサリ製作までを「sodion」の監修のもと学生たちで実施した。活動に参加している学生たちは、「活動を通じて環境問題を考え、自分の日常の生活も見直すことができました」と感想を寄せた。



学生団体の取り組み

同大の学生団体の「BUN-4U」は、月に1回、海岸の掃除活動、さらに小学生向けに「知ってもらう、学んでもらう」をテーマに講座を開き、SDGsの啓蒙活動に取り組んでいる。10月23日に行われた講座Ⅱ写真Ⅱでは、SDGsの17項目のうち「14 海の豊かさを守ろう」について行い、マクロプラスチック問題に着目して講座を行った。ウミガメがマイクロプラスチックを飲み込むとど

み込むとどまってしまうのか写真や紙芝居などを交えながら海洋のゴミの現状を説明した。講座に参加した小学生からは、「ペットボトル、きちんとリサイクルします」「ゴミをなるべく捨てないようにする、必要なものだけ買います」などSDGsへの意識変化がみられた。

活動を支援するCCC

同大学には、学生たちの地域貢献活動を応援する独自の教育センターコミュニティ・コラボレーションセンター（CCC）が設置されている。一人ひとりの向上心に込め、自主性や協調性、社会性を育むセンターとなっている。ボランティア活動を紹介するほか、全学部の学生に対して授業を開講、地域貢献活動を実施するために必要なボランティア活動の基本知識、「団体運営の方法」「活動のためのアイデアの生み出し方」などを伝えている。学生たちが立ち上げた団体の運営も支援している。

同センターの取り組みが、「環境保全」「地域活性化」「障がい者支援」「高齢者支援」「子育て支援」など学生たちの様々な社会課題に対する高い問題意識を育て活